

〈史料紹介〉

## 峯潔 『清國上海見聞録』

田崎哲郎

筆者は三河の医者を調べている中で、吉田（豊橋）の出身で他地域で活躍した人物として尾本涼海（公同）に着目し、「出世移動型の蘭方医―吉田（豊橋）出身尾本涼海の場合―」を一九八四年に『三河地域史研究 一二』（同研究会）に発表し、のち『在村の蘭学』（名著出版 一九八五）に収めた。

尾本（一八二一―一八九七）は田原藩の鈴木春山に学び、江戸で大槻俊斎・坪井信道につき、長崎を経て嘉永元年（一八四八）に大村に至り、長与家の古田の種痘山を手伝っていた。翌年長崎に牛痘苗が来ると、その受取りに長与専斎の妹（九歳）と男の子をつれて長崎に遣わされた。嘉永五年から大村藩に仕え、藩主（大村純熙）の蘭学の諮問に与った。文久二年（一八六二）四月幕府が試商船千歳丸を仕立、六十数人を乗せて上海へ派遣した折には医師として同行した。子孫宅に残っていた書留には、「此時<sup>ニ</sup>当<sup>而</sup>漢蘭治療方<sup>并</sup>ニ外国之事情心得有<sup>を以</sup>而、時之長崎奉行高橋美作守より御雇<sup>ニ</sup>相成早速被差遣旨御達し有<sup>之</sup>、下旬僕<sup>老</sup>人源助を召連出崎、廿八日開帆、五月六日吳湘江着、江蘇上海<sup>ニ</sup>滞留、七月六日上海出船し、同十五日長崎着公用仕舞、同廿七日帰国、勤方は迄通り」（拙著一八三頁）とあるが、上海行についての特別の記録は残していない。

千歳丸乗船者は高杉晋作を初め何人も者が記録を残していることはよく知られている。各記録や全体について、最も吟味を加えているのは春名徹氏であり、その多くは『調布日本文化』誌上に発表されている。筆者も浜松藩の名倉予何人の記録一点を、本誌八六号（一九八六）に「名倉予何人「海外日録」として紹介したことがある。尾本が召連れた僕源助は大村藩士峯潔と同一人で、春名氏は「峯潔の上海経験―「船中日録」と「清国上海見聞録」」（『調布日本文化八号』一九九八）で、同人の記録を紹介し、かなり検討を加えている。この史料は同氏により、小島晋治編『幕末明治中国見聞録集成第11巻』（ゆまに書房 一九九七）にも収めてある。春名氏が利用した史料は、昭和十七年に峯の姻戚に当る山下篤氏から長崎県立図書館に持込まれたのを、同館司書田中享一氏が写し、上海に在住した沖田一氏に提供したものを沖田氏が再写したものであった。それを春名氏は沖田氏から贈られた由である。田中氏から沖田氏への私信によると史料は学術振興会へ買上げる約束になっていたとのことである。春名氏は同会などで所在調査をしたが不明だったという。ところで以前『長崎市立博物館資料目録 文書資料編』（長崎市立博物館 平成元年）を見ていたら、その一六〇頁に「清国上海見聞録草稿 ㊦原 ㊧峯潔 ㊨〔文久二年〕和1冊 21丁33・8 cm 290―4」とあるのが目についた。一連の「峰文庫」本の中にあり、峯の「清国上海見聞録」の原文ではないだろうか。学術振興会に移ることはなかったようだ。現在は組織変更により長崎歴史文化博物館に所蔵されている。なお、「船中日録」は見当らないようだ。

本稿はその史料の翻刻である。筆者の関心は尾本に由来するものであり、峯については春名氏に加えるところはない。ただ春名氏が「原本を田中が浄書したさいの文字の誤読などによる誤りと沖田の清書のさいの誤り（原稿用紙の改頁のさいの文字の重複や脱落など、二重の誤りを免れていないが、これを正す術がない）（春名論文三五頁）と述べている点に加えるところがいくらかあるかと考え活字化を試みた次第である。なお近年科学史の方からも伊藤節子「科学史入門・大村藩測量方峰源助について」（科学史研究 四七巻（二四六号 二〇〇八年夏））のような研究が出ている。諸記述では峯の字は、峯、峰の両方が用いられているが筆者は原文原稿の表紙にある峯の字を用

いる。

なお本史料の活字化については、長崎歴史文化博物館の許可を得ている。

(史料紹介)

(表紙)

## 清國上海見聞録

峯 潔 草 稿

(本文)

洋中紀事

文久二年

壬戌四月廿七日晴今度唐国渡海ノ諸役人及ヒ從僕水主ノ者一同乗船ニテ明日出帆ニ極ル

峯潔『清國上海見聞録』

同廿八日晴今日出帆(可致朱)ノ筈ノ處諸事未夕調ハサルヨシニテ延引ニナル及ラ朱

同廿九日晴黎明纜ヲ解キ帆ヲ揚ケ數艘ノ曳船ニテ長崎浦出帆高鋒沖ニテ曳船ヲ外シ乾ニ向テ進行伊王沖ニテ廻轉未申ニ向フ此日風ナク海上穩ニテ船進マス野母沖六七里ニテ日沒スタ刻ヨリ雨少シク降り出ス

同晦日雨今朝未明起テ船上ニ出乾ノ方ヲ望ムニ五里バカリ隔テ五嶋ノ女嶋ヲ見ル凶ノ如シ四ツ時過ヨリ雨頻リニ降り出シ南風動ク晚ニ至テ風雨不止中朱・文中の点も朱、以下同じ船揺夜篠ラレス

舟中ノ人・多ク浪ニ酔フ舟中ノ人朱

五月朔日今朝雨猶不止南風烈シク波浪天(ヨロ) 浸シ(帆朱)・綱ニ觸ル、ノ風声恰モ樹木ヲ吹ノ怒声ニ異ナラス依テ船ヲ進ル能ワス帆ヲ卷キ・洋中ニ漂(朱)・盪ス終日終夜船動揺シ舟中ノ人荷物ト共ニ倒轉ス時ニ一人モ浪ニ酔ハサルナシ

同二日朝天晴東風吹来リ順風ニ帆ヲ揚ケ風ニ任セテ進行ス

同三日快晴海上風ナク終日洋中ニ漂盪ス夜六ツ時過ヨリ東南風吹キ来リ帆ヲ揚ケ申酉ニ向テ進行終夜風不止

同四日曇天今朝風猶吹キ布帆矢ヲ射ルカ如ク一時進行五里ヲ渡ルト云昼四時過西ノ方ニ當テ嶋ヲ見ルト云艦先ニ出テ遠望スルニ水天彷彿中一小物ヲ見ル舟乎山乎識別ス可カラス午正後岩瀬弥四郎・英人ノ地凶ヲ携ヘ来ル之ヲ

閱スルニ「サートル」ト云嶋ニテ上海ノ入口ヨリ凡三十里余東南ノ方ニアル処ノ嶋ナリ日暮ニ及ンテ凡ソ十里許隔テ南ノ方ニ此嶋ヲ見ル凶ノ如シ是上海入津見當テノ山ニテ大村城下ヨリ西海(村ノ朱)・岳ヲ見ル位ノ高サナリ夜中風

ニ任セテ進行ス

同五日晚七ツ時此上海ノ川尻ニ入津ス昨夜遙ニ燈火ヲ見ル是川口入津ノ見當ニテ燈明臺凶ノ如シ今朝曇天拂曉舟端ニ立テ遠望スルニ南方ノ地方ヲ離ル、凡ソ一里ヲ隔テ船ヲ進ム是南方ハ深ク西方ハ川口浅キ故ナリト云天涯山ナク曠々タル平野ニシテ唯艸木ノ緑色ヲ見ルノミ西ノ方ハ・長サ五町許ノ洲アリ此川口横英ノ四十里許アリト云是ヨリ流ニ遡リ四鼓過「フーソン」ト云処ニ至ル此處川横二十町許南方ノ地方ニ砲臺ヲ築キ海岸ノ備ヲ設クル(本)

長十町余我長崎海口ノ固ノ如ク堅固ノモノニアラス水涯ヨリ高三間斗ニ土手ヲ築キ間々ニ大砲ヲ備タリ西ノ方ハ  
数千軒ノ家アリ万国ノ商船河岸ニ碇泊スル即因ノ如ク実ニ風光ノ処ナリ是ヨリ上海ニ到ル水底淺ク川筋アリテ蒸  
氣ノ曳船ヲ借ラサレハ遡リ難シト云依テ爰ニ碇泊ス

同六日晴朝六時半時火輪船ニ曳レテ「フーソン」ヲ發シ上海ニ到ル日本里程八里許其間川横十町余狹キ處四町許  
ノ處モアリ西ノ方ハ人家多ク川端ニ往末アリテ直ニ上海ニ達ス南ノ方ハ人家間原ニアリ西南共ニ平地ニシテ田畠  
ナリ昼四時過上海ノ港ニ着船ス此処川横十町長四十町許ノ処各国ノ夷船輻輳シ清國ノ艇船數知レス帆樞ノ連立ス  
ル恰モ林ノ如ク實ニ繁花ノ地ナリ

## 上海見聞

### 地形風土

夫上海ハ古エ禹貢揚州ノ地ニシテ周ノ時ハ吳ノ地タリ吳滅ヒテ越ニ入り越亡テ楚ニ入ル秦ノ世ニハ婁縣ノ地ニシ  
テ會稽郡ニ屬ス唐ノ世ニ華亭縣ヲ置キ元ニ至テ之ヲ改メ松江府トス又華亭ノ地ヲ割テ上海縣ヲ置キ都テ七縣トス  
上海ハ其一ナリ当代清朝ニ至テモ是ヲ改メス其地東北ハ海ニ沿ヒ西南ハ曠々タル平地ニシテ一ノ山岳ナク極出地  
三十一度三十二分我長崎ヨリ海上凡日本里程二百五六十里方位申酉ノ方ニ当ル上海ノ縣城大江ニ臨ミ南ノ方華亭  
縣ヨリ流ル、ヲ黃浦ト云ヒ此ヲ上海港ノ本流トス西北ノ方嘉定縣ヨリ流ル、ヲ吳松江ト云此兩川縣城老北門ヨリ  
北ノ方十四五町ノ処ニテ落合ナリ此處吳松江ノ流ニ橋アリ大橋ト云<sup>長六</sup>近年英國ヨリ懸ケシ橋ニテ大船ノ通行ス  
ル寸ハ中間披クヨウニ仕組タリ橋ヨリ向フハ亜墨利加ノ居留所當時普請ノ央ニテ横ニ丁余長サ江ニ沿ヒ三四町モ  
アランカ其先ハ田畠ニテ田舎ナリ合流ヨリ南ノ方黃浦ノ水上四十町許<sup>此間川幅六七  
丁或ハ八九丁</sup>ノ間ヲ上海ノ港トス即萬國ノ商船

専ラ碇泊ノ處ニテ此邊ヲ申江ト唱フ依テ其故ヲ土人ニ問フニ楚ノ威王越ヲ滅シ春申君ヲ此地ニ封セシニ申君此處ヲ堀リ通シ水利ヲ理メシ故斯名ケシト云水源ハ洞庭湖ヨリ發シ揚子江ノ分流ニシテ楓橋赤壁等モ此水上ニテ寒山寺モ其跡今ニ存セリト云大橋ヨリ川下ハ吳松黃浦分流ノ海ニ入ル其間凡我三十里余所謂松江ノ鱸ト云ハ此川ニテ漁スル処ナリ松江志府曰東西距八十六里南北距八十四里東ハ川沙撫民廳界ニ至テ三十里東北ハ大倉州宝山縣界ニ至テ三十六里東南ハ南漕縣界ニ至テ十一里南ハ同縣界ニ至テ七十二里西南ハ華亭縣界ニ至テ八十里西ハ青浦縣界ニ至テ三十六里西北ハ大倉嘉定縣界ニ至テ三十里北ハ同州宝山縣界ニ至テ十二里ト云々即此間ヲ以テ上海縣トス元ノ至元二十九年始テ縣城ヲ置クト云當時其城ト唱フル処ヲ見ルニ唯周圍ニ堀ヲ廻シ横六七間或ハ三四間ノ處モアリテ城壁ハ瓦ヲ以テ築キ高三間許廓門七(ヨリ)所(小東門南門小南門西門北門老北門ノ名アリ)周圍凡日本里程一里二十三三四町是ヲ城内ト唱エ實ニ淺間ノ様子ニテ我城ノ如キ堅固ノモノニアラス

城内官府廟堂ノ外ハ大概店坊ナリ街路至テ狹ク幅一間位ニシテ往來甚ク混雜ナリ又其間ニ一二町ツ、店肆ノ無キ小街アリ因テ問曰此近巷市井乎抑官人所居乎答曰此処市井多而官居少現因避難者多雜處不分又問曰巷中無店肆者以何事爲産乎曰凡店肆皆在大街之上小巷中無店肆者其所居之人大半是店肆中眷(口)也「家屋ハ都テ二階造リニテ屋上ハ瓦ヲ以テ葺キ二階下ハ土間ニテ板(式)ハ瓦ヲ敷キ我長崎唐館ノ家造ニ異ナラス表口大略三間或ハ四五間ノ家モアレト斯ノ如キハ稀ナリ問曰城中縱橫街路幾條答曰縱街四條橫街三條而小街不在内又問曰城中戸數若干答曰大約以萬計ト云後又委シク聞シニ戸數一萬二千余軒人口三萬六千余人ト云然ルニ近世賊亂ニ依テ難ヲ避ケ未往ノ者多ク其數分明ナラサルヨシ

奉行所ハ道臺ト申テ大東門ノ内ニアリ外ヨリ觀望スルニ閣門ノ様子寺院ノ如ク内ニ入ル甲乙丙ノ三門アリ甲門ヨリ乙門ニ到ル其間凡十五間左ノ方ニ大砲七八挺備エタリ乙門ト丙門ノ間ハ僅ニテ向フニ閣樓アリ其下ニ二百目位ヨリ三貫目位マテノ鍊ノ銃丸ヲ山ノ如ク積ミ重子タリ是ヨリ左ニ曲折シ少シノ処ヲ過レハ即道臺ノ居所ニテ廊下ノ如キ処ヲ行キ應接ノ間ナリ向フニ別齋アリ左右ニ官人ノ部屋アリ此間六間許ノ壺ノ内ニテ中央ニ閣道ヲ設ケ別

齋ニ到ル左右空隙ノ地ニ名石ヲ建テ假山トス実ニ奇石ナリ樹木ハ梅檀ノ如キノ一株アルノミニテ其外草木ナシ上海ノ奉行所ナレハ屋敷ノ構エモ今少シハ廣大美麗ナラント思ノ外手狭間ニテ龜抹ナリ

廓内ヨリ西北ノ方大橋マテ凡十四五町ノ間英佛ニヶ國ノ居留所トス即此境内ニ萬國ノ商館高閣ヲ建連子阿蘭陀ノ商館モ此佛蘭西居留所ノ内ニテ老北門ヨリ東ノ方三町許水安街ト云処ニアリ我旅亭ハ即此蘭館ノ隣宅ニテ宏記ト云夷国造リノ家ヲ借り羈旅トス此處ハ川端ニテ前面ノ道幅八九間或ハ十間江ニ沿テ往來アリ此邊ハ夷人居住以未新二町家ナトモ建シ処ニテ縱横ニ街路ヲ割り道幅廣ク随テ街中モ稍清潔ナリ廣狹大略廓内ト等シ年中在留ノ夷人一万五千人アリト云

市中井戸ヲ穿タス只城中三四ヶ所アリト云依テ皆江水ヲ汲テ日用トス然ルニ江水重濁ニシテ直ニ呑ム<sup>(マ、以下同)</sup>能フス明礬ヲ以テ濁泥ノ汚物ヲ沈メ而後漸ク呑ム可シ是我国ノ人居留難洪ノ第一ナリ

土地ハ泥土ニシテ砂石ナク疲瘠ノ地ト見ユ畠物綿作ヲ專トシ豆茄子木瓜西瓜甜瓜類其外野菜等何モ變リシ<sup>ナシ</sup>然レ<sup>レ</sup>田畠ノ様子ヲ見ルニ作り方疎漏ニシテ草ヲ除ケス荒所多シ

上海中糞芥路ニ満チ泥土足ヲ埋メ臭氣鼻ヲ穿チ其汚穢言フ可カラス依テ土人ニ此事ヲ詰問セシニ以前ハ斯マテハナカリシニ夷人未往以未上海ノ繁昌ニ從テ斯ク通路ノ不潔ニナリシト云是土人目前ノ利ニ走り日傭持ヲ專トシ農業ヲ切ニセス不淨ヲ棄テ田畠ノ肥シニ用ヒサルヨリ自然路傍ノ尾籠ニナリシモノナリ按スルニ凡ソ惡病ノ流行スル腐敗ノ氣是カ害ヲカス<sup>レ</sup>最モ多シ故ニ上海中毎年炎暑ノ時節ニ至レハ必ス惡病大ニ行レ人民ノ死スル甚多シト云是等ノ事路上ノ末事ナレ<sup>レ</sup>人命ニ拘ル<sup>レ</sup>ナレハ国家ヲ治ル者心ヲ留メスンバアル可カラス

### 制度

土人平生ノ便服ハ皆一樣ニテ異ナラス故ニ途中ニ在テハ上下ノ分別ナシ問曰衣服色樣隨所好而無妨乎<sup>顧</sup>曰常服無妨至于功名之衣服等級各有不同

顧<sup>異</sup>問曰貴邦有科場考試乎曰有之然不持文試又有武技之考矣又問曰重文試乎抑重武技乎曰最重武技矣<sup>異</sup>曰敝處重文試不重武技矣中國以文場出身不比貴邦有世祿故不重武技而重文試今逆匪擾亂亦稍重武技矣」按スルニ當今清國ノ風文弱ニ流レ遂ニ夷蠻ノ力ヲ恃ムニ至ル是萬邦ノ殷鑑ナリ

問曰古昔八歲入小学當今如何<sup>異</sup>曰當今六七歲乃入學曰商家子弟亦入學乎曰但不講究耳又問曰古鄉拳之法今尚在乎曰各省皆行江南以寇亂已停而三科曰鄉拳之法如何<sup>異</sup>曰初學童子試取中曰秀支應省拳中選曰孝廉然後進京試禮部曰進士然後殿試<sup>異</sup>曰刻今栽培子弟自六七歲必延明師教讀無力者以次而降大凡書家無論延師自訓必加考究至商農等多艸率故所學多不成<sup>譯</sup>曰延師一月所費幾何曰價無定有文學者一月約銀廿兩<sup>異</sup>曰士人科第中不下幾百至於能作真文章不多得」按スルニ唐主文學ノ盛ナル一四方是二及フ者ナシ然ルニ近世ノ弊只文具ノミニテ實用甚タ稀ナリ且其學フ所以ノ者專ラ科級ヲ取ルニ志シ己カ为ニスルモノナシ是學フ者ノ罪ト虫<sup>マ</sup>氏官制出身ヲ此ノ一路ニ限ルノ弊ナリ然ラサレハ何ソ幼ヨリ大金ヲ費シ文藝ニノミ吸<sup>マ</sup>々タランヤ

一日馬銓ノ寓居ニ至ル時ニ偶祭リヲ为ス其武門ノ内外エ紅白黃等ノ紙旗ヲ建ツ其旗ノ文字ハ皆冥福ヲ祈ル等ノ語ヲ書シ門内正面ノ堂ニ位牌ヲ設ケ左右ト前列ニ數種ノ画幅或ハ燭臺燈籠ヲ陣子笙ヲ吹キ鉦或ハ木魚ヲ打チ其祭法儒カ僧カ分明ナラス依テ之ヲ馬銓ニ問テ曰今日尊堂祭祠乎答曰是二周年忌曰今日即所謂大祥乎曰今日即是又問曰今此式礼儒乎僧乎曰此家祭不用僧道<sup>此說可疑</sup>又問曰大祥後幾日免喪乎曰(イワク)大祥後三個月曰貴邦人皆行三年喪乎曰国家定制二十七個月曰(いわく)喪服與古異乎<sup>銓</sup>曰服式俱遵本朝又曰喪礼凡死父子即枕苦居棺柩旁既葬而反亦有廬墓三年者近日礼衰不講者多矣」按スルニ世ノ衰ルハ人情ノ洗漓ヨリ生ス洗漓ノ至リハ喪ニ臨ンテ哀マサルヨリ大ナルハナシ宜ナル哉清國衰乱ノ極ル」

問曰官人死後幾日而収其祿乎<sup>管慶樞</sup>曰王家俸祿計日而算死之日即停又曰大貴者另有恩給祭葬銀兩平常者則自食其力矣

問曰上海現兵幾人<sup>慶樞</sup>曰松江提督標下所管二十七營每營千余或七八百不等而上海額設兩營其餘撫臺所統勇士

□レ

萬余人譯曰吾前問之道墓從者則不如此多而其說不詳故復問之今聞一萬二千余兵然則何為借英佛之兵哉曰上年十二月時新撫墓尚未到上海所存兵勇均存安慶地方離此有七百餘里是以請借英佛二國助守城地譯曰今借英佛兵他日貼石晉之患其如之何抑以英佛心情為可倚信乎曰此乃上年危急之秋不暇慮及且顧目前之計譯按スルニ兵ノ要ハ精ニ存テ衆ニアラス然ルヲ今清人徒ラニ其象多ナルヲ誇張シテ却テ其微弱ノ恥ヲ顯スヲ知ラス譯現ニ上海ノ陣屋ニ到テ其兵卒ヲ見ルニ土兵ニテ敝衣垢面徒跣露頭無刀皆乞食ノ如ク一人ノ勇アルヲ見ス斯ノ如キハ我カ一人彼ノ五人ニ敵セン若シ一萬騎ノ兵ヲ卒テ彼ヲ征セハ清國ニ縱橫セン

### 事情

豹ノ一班ヲ見テ其全体ヲ見サレハ固ヨリ其美ヲ知ルヲ能フス然レト名醫ハ一手ノ脉ヲ察シテ心腹ノ病ヲ知ル抑清國ノ病ハ特ニ腹心ニアルノミナラス面目ニアラワレ四體ニアフレ一指一膚モ痛マ寸ル所ナキナリ去レハ上海ノ一所□（口）以テ十八省ニ推セハ其大概ヲ知ルヘシ當今上海ノ勢ヲ見ルニ内ハ長毛賊ニ迫マラレ外ハ洋人ニ制セラレ只城内ニ噉喘スルノミニテ手足ヲ動カスヲ能ワス縣城ノ前ニハ數千ノ商船集リアレハ至テ盛ナル様ニ見ユレト其運上税銀スラ自ラ取ルヲ能ワス尽ク佛郎西ト英吉利須トノ兩國ニテ收入スルヲナリ且又城門ヲ守ルニ官兵足ラスシテ英佛ノ兩國エ城門ヲ預ケ守ラシム夕陽ニ到レハ城門公克ノ外出入ヲ許サス夜五鼓ヲ過テ通ル者ハ是非ヲ問ス釋メ役所ニ送リ明朝糺明ノ上子細ナケレハ科銀三枚ヲ出シテ之ヲ許ス故ニ夜中ハ寂トシテ人ノ往來ナシ又學校ハ英人ノ陣屋トナリ一人ノ（マ）生モナク堂々タル聖廟モ彼等カ巢窟トナリテ聖像モ何処エ散乱セシヤ影狀モナク實ニ哀ナル狀勢ニテ豈ニ大息ニ堪サランヤ

今度日本ヨリ始テ唐國ニ渡海セシニ依テ先ツ道墓ニ往テ對面ス阿蘭陀コンシユル案内ニテ日本官人駕ニ乗り旅亭ヲ出テ往クヲ十町余道墓ノ門外ニ赴リ時ニ小砲三發ヲ放チ次ニ笛ダツハヲ吹キ我ヲ祝ス時ニ甲門ヲ開キ爰ヲ過キ駕ヨリ下レハ門忽チ閉ツ道墓乙門ニ出迎ヒ式礼ヲナシテ先ニ立丙門ヲ過キ殿中ニ遵キ應接ノ間ニ案内シ席ヲ設ケ對話スルヲ數刻後席ヲ遷シテ酒肴ヲ出シ饗應良久シ後帰ル時道墓又丙門ノ外ニ送ル送迎共ニ甚タ礼有ルカ如シ然

レ氏其属官有司等瑣細野鄙ナルヲ見ルニ忍ヒス其所为如何トナレハ我衣服草履等ニ目ヲ属シ或ハ手ニ取テ其價ヲ問ヒ或ハ有司等互ニ耳語シテ其品ヲ評シ其識見賤ム可シ又市井ノ人我等ヲ見ンカ为メニ数百ノ人門ノ潜リヨリ竊ニ群リ来テ我前後ヲ取圍ミ官人制スレ氏恐ル、色ナク帰ル時道臺送リ来ルニ道ヲ避ケス其狀勢実ニ法ナキカ如シ道臺ハ吳煦ト申テ浙江錢塘縣ノ人官ハ布政使司上海ニテ之ヲ藩憲ト称シ道臺ハ兼役ナリ日本人工應對ノ为阿蘭陀館工来ル途中ノ行列真先二旗一本其跡騎馬一人涼傘一本左右二鎗六本赤旗四本大旗二本駕先劔持三人其跡道臺駕ニテ左右ニ從者四人駕夫六人跡二騎馬二人ナリ此者ハ西人共ニ近習ノ者ニテ應接中烟艸等ヲ付ケ道臺工進メ其外手働ノ要ヲナスモノナリ道臺蘭館ニ入ル門外ニテ刀ヲ脱シ無刀ニテ内ニ入ル其刀ヲ持テ門外ニ待居ル者我等ニ向テ其刀ヲ拔キ示シ自ラ其鈍刀ナルヲ嗤笑ス道臺ノ權威ナキ此一一事ヲ以テ察知スヘシ

清国十八省ノ内稍靜ナルモノハ僅ニ五省ニテ餘十三省ハ殆ント清国ノ領ニアラスト云

上海中四方ノ難民群集スル故米價日々沸騰シ米百斤ニテ錢九貫文日本ノ相場ニスレハ二十七貫文ニ此ル其外諸品何レモ高料ニテ下賤ノ者ハ米或ハ牛豕等ノ肉ヲ食スル能ハス今日我船ニ来ル日傭ノ者ヲ見ルニ恰モ餓鬼ノ如ク骨ト皮斗リニテ一人モ支牀ノ肥タルヲ見ス此狀勢ニテハ近日餓死ノモノ多カラシ

申江ノ内日ニ難民逃レ来リ今ハ江面隙キ間モナク小舟ヲ浮ヘテ住居ヲ搆ヘヌ間曰今此江中之人皆何處人乎録曰此係蘇州難民矣譯曰大概有幾人録曰難細言約十萬餘人譯曰此十萬人所食米鹽皆買之於上海市上乎曰然矣曰費價日當騰湧矣曰一石米價常日三四千錢今則九千錢矣譯曰錢尽將如何曰無可如何譯曰官府亦無可如何乎曰官府難辨按スルニ仁者有勇矣若シ仁者此十萬人ノ命旦夕ニアルヲ見バ必ス憤發シテ是ヲ救ン今一人ノ是ヲ哀レムナク英佛等清国ヲ助クト虽氏亦利ヲ是計較スルノミニテ真ノ仁心ニアラス故ニ此難民ヲ見テモ啻タ救サルノミナラス時ニ或ハ此ヲ凌辱シ少シモ哀憐ノ情ナシ嘆息ニ堪ヘサランヤ

問曰所見滿江難民約不下十萬不出數十日而食將尽矣將如之何譯答曰此間海口甚便有牛庄秬西洋商載来又有江北仙女廟產秬米甚多商人陸續筹辦缺米之患可以無慮譯曰幸有此一事稍放心矣譯曰聞貴国米頗佳何不販至此乎曰此大禁

也若一開之猶商相爭販出矣則國中米價騰湧小戶貧民將餓死矣」按スルニ米穀ハ人命ノ關スル處ニシテ國家ノ急務此ヨリ先キナルハナシ今夫ノ上海ハ海口ノ便ニヨリ人命尚暫ク保ツヘシ若シ我日本山間ノ國ノ如キ海路通セズ陸運モ亦便ナラサル処ハ必然非常ノ儲ヘ無カルヘカラス假令其國中乱無ク阨四境或ハ不慮ノ禍アラハ必流民未リ集リ一二年ノ貯ハ不日ニシテ尽シ即四方禍ヒノ為メニ其国力ヲ耗シ相隨テ斃ル、ニ至ルモ知ルヘカラス是國家ヲ治ル者其自國ノ治乱ニ由ラス米穀ヲ貯ヘサルヘカラス

問曰申江中多少難民今此梅雨中蓬漏舟濕實千苦萬艱若留于此而經三月之久則人皆將病且上海市上秬米騰湧將以何生活且官府有意於救之而不能乎抑實無救之意乎慶棟曰難民到此官府設有難民廠酌給米石其有不慮進廠者聽其自謀生計今江中所泊之船皆是別處逃來自謀生計不願入廠者也此說可疑

問曰十八省中賊匪何處最激烈銓曰南京又問曰逆匪有可滅之期乎答曰此天數也潔曰雖由天數能治人事則有挽回天運之理矣且天之所佑在順而不在逆也」按スルニ清國ノ人苟モ難事アレハ住々此ヲ天數ニ付シテ問ハス是禍ノ至リ止ル処ナキ所以ナリ

顧寧曰僕本居浦東上海ノ川向ヲ總名浦東ト云自旧冬十二月南滙城陷遁至此已四五月浦東所居廬舍已於三月中被焚金石圖書書籍付之一炬言之不勝嗚嗚也」按スルニ唐土屢爭乱ニ遇ヒ人命ノ損スルハ勿論古器寶物ノ散逸スルヲ想知スヘシ況ヤ今次ノ乱ハ革命吊民ノ師ニ非ス幣帛ヲ奪ヒ人家ヲ焚キ清國十八省中處トシテ是ニ非ラサルハナシ然ラ則今次ノ擾乱ニシテ古ヨリ幸ニシテ遺リシ古器寶物將ニ蕩尽セントス惜ムヘキノ甚シキナリ

問曰南滙城距此幾里響曰距此僅三十里惟隔春申江耳又曰刻下賊氛四逼只存上海孤城一角所有北方寶山尚未失陷松江屢失今有李公守松城尚不至潰裂然賊勢頗猖獗此地亦覺危如累卵所恃西夷身家頗重富商都在此吾邑有司不過靠樹影耳」按スルニ昔シ石敬瑭夷狄ノ力ヲ借りテ終ニ其大患ヲ遺ス今清國唯其力ヲ借ルノミナラス自ラ其城ヲ守ルノ能ハスシテ夷狄ニ託ス去レハ他日患ヲ遺ス一豈ニ計ル可シヤ

問曰俄羅斯近日之情如何嘗聞頗垂顧於貴邦信乎響曰俄羅斯前年有黑龍江之割現今已和好」又問曰聞英佛花旗阿蘭

等亦畏俄羅斯信乎曰然」按スルニ五大洲中大国多シト垂涎大抵目前ノ富強ヲ争ヒ遠大ノ計策ナシ甚シキハ只二一日又一日ヲ送ルノミニテ絶テ進取ノ慮リナキ者アリ俄羅斯ノ如キハ目前ノ利ヲ争ハズ惟遠謀是務ム是各国ノ畏ル、所以ナリ

問曰貴邦洋人之所集會果何地為最<sup>繁</sup>曰上海為最次則廣東」按スルニ當今清國ノ形勢譬ハ萬國ノ傳舍ノ如シ自ラ其力ヲ食マズシテ他人ノ餘潤ヲ仰クノミ

問曰上海港所集商船何国最多<sup>繁</sup>曰止多紅毛第二花旗」按スルニ西洋富強ノ国英佛俄羅斯ノ如キ何ンソ紅毛花旗ノ下ニ出ンヤ然ルニ第二等ニモ加ハル「ヲ得サルハ何ソヤ蓋シ英佛ノ二国ハ專ラ戦争ヲ好ミ惟強是レ競ヒ奥<sup>カ</sup>國ノ属託ヲ受レハ敢テ是ヲ辞セズ當今長毛賊ノ為メニ毎日數艘ノ舟ヲ出シ申江ヲ固メ或ハ訓練シ或ハ城門ヲ守ル等ノ「其事情義ニ似テ是義ヲ為スニ非ス一ハ強ヲ示シ一ハ價ヲ貪ルナリ俄羅斯ノ如キハ即素志土境ヲ廣ムルニアリテ輒モスレハ各国ト疆論ヲ構ヘ寸地モ廣メント欲ス凡ソ此ノ三国ハ專ラ通商貿易ヲノミカスニアラス故ニ商買ニ於テハ紅毛花旗ノ右ニ出ル「能フサル乎

上海ハ萬國ノ輻輳スル都會ノ地ナレハ何ぞモ速カニ聞クト見エ先ツ一事ヲ挙テ言ハ吾土人ニ問テ曰先嘗聞日本人將來何日前也<sup>夫</sup>曰本月初一日以聞貴邦人到此地」日本人ノ此地ニ未ルハ即其月ノ六日ナリ然ルニ朔日はヲ聞ク速シト云ヘシ惟新ニ未ル國ノミナラス萬國通商ノ船ナレハ皆前ニ是ヲ聞キ其貨ヲ待チ居ルト見ユ

江南ノ人難ヲ避ケ上海ニ未往スル開雲ト云者アリ商用ノ事ニテ屢我船ニ未ル嘗テ長崎ニ渡海セシヨシニテ少シク我語ニ通ス依テ合戦ノ様子ヲ尋シニ官軍賊ヲ防クニ英佛ノ力ヲ借ル銀錢ヲ出シテ之ヲ頼ムト云譬ハ賊一萬ノ兵ヲ以テ上海ヲ攻ントス官軍之ヲ英佛ニ防カントスル洋銀三万枚ヲ出サント云英佛五万枚ヲ得テ之ニ当ラント云即銀ノ多少ニ依テ請合軍ヲ買フ「ノ由シ英佛專ラ大砲ヲ用ヒ賊軍素騎戰ヲ專ラトス依テ銃丸ニ恐レテ上海ヲ襲フ「能フスト云按スルニ英佛ノ兵ヲ用ユル義ニ出ス只利ヲ是貪テ人命ヲ顧ミサル等ノ「此一事ヲ以テ察スヘシ

當今清國ノ勇將ハ曾国藩、袁申三、僧格林心ノ三人ナリト云刻下曾國藩南京ノ長毛賊ヲ破リ克復スト云

劉卯膏ト云人アリ嘗テ上海ノ奉行タリシニ程ナク海防官ニ轉シ當時ハ按察使タリ元末潔白ノ人ニテ公事裁判行届キ屢賊ヲ征スルニ臨テ懼怯ノ氣ナク上海地方ニ於テ是ヲ劉青天ト稱シ又北京ノ聞エモ宜シク右等ノ人軍務ニアツカリ当年ニ到テ南滙城ヲ取り返シ賊勢少シハ衰エンヨシ然レト当四月四日ノ合戦ニ官軍利ヲ失ヒ大將討死古城ト云処陥リシト云

上海城ヨリ西南ノ方数ヶ所ニ清国ノ兵竝ニ英佛ノ兵野陣ヲ張り毎朝未明ヨリ四ツ時過マテ大砲小砲ヲ放チ兵率ヲ鍊リ上海ヲ固ム七月朔日<sup>譯</sup>上海近郊ノ陣屋ニ至テ兵率ニ聞シニ當時長毛賊上海ヲ距ル九十里青浦ノ地ニ退キ先ツ此近郊ハ穩ナリト云

右ハ清人ト筆談並ニ見聞ノ大略ヲ記ス長毛賊ノ一件ハ粵匪紀略盾鼻隨聞録金陵隙談等ニ詳ナリ

(以上)

## Report on Shanghai (上海) by Mine Kiyoshi (峰潔) in 1862.

(Résumé)

Tokugawa Government (徳川幕府) dispatched a ship called Senzaimaru (千歳丸) in 1862 to search a way of trading with China. More than 60 members on board, including Takasugi Shinsaku (高杉晋作), Godai Tomoatsu (五代友厚) etc. In them there was Omoto Ryokai (尾本涼海), who came from Yoshida (吉田 = 豊橋). At that time he belonged Omura clan (大村藩) as a doctor. Once I wrote a paper about him. It has contained in my book, "Dutch learning in rural country (『在村の蘭学』). Omoto accompanied Mine Kiyoshi, who wrote this report. Haruna Tooru have treated Mine's visiting on Shanghai from various view points. My introduce of Mine's report compensate a little his treatises.